

# 日米の実証研究にみる祖父母―孫関係の発達的变化

## －祖父母・親・孫のライフステージを単位とした検討－

諏 澤 宏 恵\*

### 1. 問題と目的

個人が属する家族は、それぞれのコミュニティや国家イデオロギーをもつマクロ社会からの影響を受けながら生活をしている。すなわち家族は、その時々社会人口学的変化や政策、戦争や社会的危機の影響を受けて、その役割や関係性が変化する（Bronfenbrenner,1981）。

本論では、そうした異なる時代の社会的影響を受けた祖父母と孫の異世代間の関係性に着目し、主に米国の調査と筆者が日本において実施した調査結果を比較し、祖父母―孫関係の変化とその文化的差異を探ることを目的とする。

米国では、祖父母は子どもや孫の家族を潜在的に支える資源として考えられるようになっている（Ferguson,2011）。その背景には、1980年代半ばから社会問題化しはじめた単親家庭や若年未婚の母親、虐待、薬物依存などの増加があり、親の養育代替として里親となった祖父母のもとでは、孫の社会適応が良いことが明らかにされている（Wallerstein & Kelley,1980；Hetherington et al.,1985）。これらの結果は、「祖父母力（Strom,1997）」を育成するための教育プログラムの需要を後押しし、全米各地で展開されている（Foster Grandparent Program,Public Law 93-113,42 U.S.C. § 5011）。

そして、現在では、そうした資源としての祖父母の力を引き出したり、その力加減を調整したり、孫との交流頻度を調整する親世代を含む世代間のダイナミックな営みに注目が集まっている（Kornhaber,2002、Monserud,2008）。そもそも、親世代が祖父母―孫相互の関係を決定するような調整機能は、Robertson（1975）により親のmediator機能として提起された。Robertson（1975）は、祖父母と親の果たす子ども（孫）への社会化役割は十分条件であるという仮説のもとに、システマティックレビューを行い、親のmediator機能が発揮される条件を整理した。すなわち、①親が祖父母を社会的個人的に重要とみなしているほど孫との交流は促され、②孫の誕生日や病気、家族の問題の救助など、特定の出来事において祖父母からの救助が増す。反対に、祖父母からの頻繁な交流は「おせっかい」とみなされる。③数ある行動の中で、養育（ベビーシッティング）と、絵本の読み聞かせなどの家庭内での創作的行動のみが、親または孫からの依頼により交流の契機となり、交流頻度を増していた（親が交流のイニシエーターとなる）。しかし、この時点でRobertson（1975）は、親が祖父母―孫の交流を調整し決定することの意味づけや、その方法についての具体的な議論を展開するまでには至っていない。

その後、Robertson（1975）の見解とは逆に、親世代に祖父母が養育モデルを教示するなど、孫の教育や養育に影響する祖父母のmediatorとしての間接的機能に焦点が注がれはじめた（Kornhaber,2002；Monserud,2008；Barnett,2010）。ここでのmediationとは、「問題解決に違いのあ

---

\* 社会生活環境学専攻

る人々が互いに努力する過程 (Kornhaber,2002)」と定義され、しばしば深刻な法廷での調停の前にインフォーマルな形式で、費用をかけずに調停可能な人材として期待される祖父母の調停力を指す。

さらに昨今では、アフリカ系アメリカ人にとって、貧困や略奪、低い医療保険未加入率や教育歴といったマイナスの要因が長い歴史にわたり彼らの生活に暴露し続けていたにもかかわらず、祖父母が養育に踏み込み強くかかわっていることが、家族のResilience (ストレス弾性) を強めてきたという見方がなされるようになってきた (Silverstein & Giarrusso,2010)。

このように、親世代の在り方をはじめとして、孫—祖父母の関係性の質を変化させる要因が明らかにされているにもかかわらず、それを包括的に理解する上での概念や理論枠組みは未だ少ない。その中で、Tomlin (1998) は祖父母、親、孫の相互作用の概念モデルを示している (Figure1)。図の祖父母⇄孫 (A)、祖父母⇄親 (C)、親⇄孫 (D) の双方の関係性は、直接的に観察可能なものであり、親—孫関係Dへの (からの) 祖父母の影響 (B)、親—祖父母Cへの (からの) 孫の影響 (E)、祖父母—孫Aへの (からの) 親の影響 (F) は、観察されにくい間接的な影響として検証されるものである。

しかしながら、こうした直接的・間接的な祖父母の孫への影響の結果としてのアウトカム (孫の成長や発達に寄与する結果) はいまだに実証レベルで明らかにされていない。

さらに、このモデルには、孫の成長発達や、祖父母の発達 (または加齢)、親にふりかかる発達

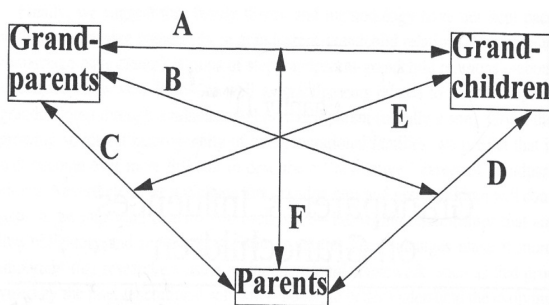


Figure1  
Influence Process among Grandparents, Grandchildren, and Parents  
Tomlin(1998)より転載

的課題やライフイベントの影響が加味されておらず、限定的である。

そこで、真に関係性の変化を捉えるには、Tomlin (1998) の上記モデルには示されなかった、孫—親—祖父母世代のそれぞれのライフステージを横断する関係発達のステージモデルが必要である。そこで本論では、孫—親—祖父母の関係性と孫のアウトカムに関して、それぞれの発達の要因やライフイベントを交えて検証

された実証研究から、関係発達のステージモデルについて検討する。関係発達段階は、孫の発達を軸として、Ⅰ期 (幼少期)、Ⅱ期 (学童期)、Ⅲ期 (思春期)、Ⅳ期 (青年期) に区分し、各期の関係性の特徴をレビューする。国内の調査データは、先行研究が乏しく、拙稿の青年期の孫の回顧的語りからの祖父母—孫関係の変化 (諏澤,2012b)、祖父母の語りにおける孫との関係の変化 (諏澤,2012a) を用いる。

## 2. 結果と考察

### Ⅰ期: 誕生から乳幼児期の孫と祖父母との関係性

Vandellら (2003) は、出産前から調査協力に応諾した1,229家族に対して、出産後3か月を始期として、3か月ごとに36か月までの期間、延12回に及び母親を対象に、母親の就労時間やスケジュール、世帯構成、家計収入、日常的な養育形態とその時間についてインタビュー調査を実

施した。その結果、出産後3か月のベースラインで、約14%が祖父母による養育サポートを受けており、12か月時点では、養育形態が固定化していた。すなわち、①フルタイム群（調査時期12回中4回以上が30時間／週（w）以上の祖父母による養育を受けている）では、最初の3年間のうち、平均9調査期間（27か月）にわたり平均27.6時間／wの祖父母ケアを受けており、②パートタイム群（全期間中少なくとも4調査期間において30時間／w以下の祖父母による養育を受けている）は、最初の3年間のうち平均8調査期間（約24か月）にわたり平均14.6時間／w祖父母からケアを受けていた。さらに、③散発群（祖父母による養育量が4調査期間以下でばらつきのある群）では、平均3か月、9.7時間／wのサポートを祖父母から受けているにとどまっていた。また大多数（n=787）は、祖父母の日常的ケアを受けていないと回答していた。このように、祖父母の養育ケアへの介入は、孫が生後3年を経過するまでの乳幼児期に頻出していた。さらに、Vandellらは、こうした祖父母の孫の養育ケアを予測する要因を多項ロジスティック回帰により分析した。その結果、祖父母と同居の方が、①②③の養育介入群をより説明し、母親のフルタイム就労が①フルタイムサポート群を、母親の年齢が若年であるほど③散発的サポートを有意に説明していた。また、従来の知見と異なり、母親が白人の方が、①フルタイムサポート群を強固に予測し、家族収入や、両親の有無、母親の学歴はそれぞれの祖父母のケアタイプの差に有意な関連を示さなかった。同居祖父母の方が孫の養育ケアに積極的なことは従来から指摘されており（Baydar & Brooks-Gunn,1998）、20年を経てもこの傾向は追認されたということになる。

しかし、アフリカ系アメリカ人やヒスパニック系に多い祖父母の養育介入実態と低所得者層の割合の関連（Hayslip,2012）は追認されなかった。Vandellらはその理由に、従来の研究は2変数の分析にとどまっていることをあげている。

米国の人口学的特徴として、孫の養育を祖父母が単独で行っている人口は、2000年統計で、アフリカ系アメリカ人（52%）、アラスカ系（56%）、白人（41%）、ヒスパニック（35%）、太平洋信託統治諸島（39%）、アジア系（20%）という結果であり、祖父母との同居率は、アフリカ系アメリカ人（8%）、アラスカ系（8%）、白人（2%）、ヒスパニック（8%）、太平洋信託統治諸島（10%）、アジア系（6%）である（US Bureau of Census,2001）。さらに、社会的特徴として、祖父母による孫の養育介入が日常的にある家庭の約19%は政府の定める貧困レベルを下回り、健康保険未加入の子どものうち祖父母が世帯主の家庭は33%にのぼり、親不在か親機能が不全な“skipped generation”は、親の離婚や、薬物依存、投獄、失業、子ども虐待の増加などから増加の一途をたどっている（Hayslip,2012）。

Vandellらの対象に民族の偏りがあることは否めないものの、上述の祖父母の養育介入の背景にある機能不全な親の要因は、結婚直後に始まるというよりは、より長期的な問題と考えられ、調査時期が第1子誕生の頃であるこの調査に反映されなかったと考えられる。

したがって、I期は、物理的に祖父母が孫の養育ケアを行うことを中心に親をサポートする段階であり、母親の就労によって、その量が増減する時期であるといえる。

また、Kornhaber & Woodward（1985）は、5歳～18歳の子ども（n=300）を対象に、彼らの祖父母の絵画描写を求め、同時に彼らにとっての意味について聞きとりを行い、祖父母との接触頻度により、結果を1群（頻繁群）、2群（散発群）、3群（皆無群）に分け、関係性の特徴を示した。祖父母と親近感をもち暖かい関係を築いていた子どもは調査対象のわずか5%にすぎなかったが、

祖母の多くは、マドンナや“母なる大地”や、おいしい食べ物の供給源として描かれ、祖父は、物語を聞かせたり、工作を教えたり、そこにある親しい世界についての一般的な案内人として描かれた。また子どもたちが、祖父母の愛を知っているという安心感は、憤りや、怒り、心配、憐み、ユーモアを自由に表出する彼らの絵の中に描きだされ、孫が若年の生活局面において祖父母は、情緒的巧妙さを持っていると指摘している。反面、2群の子ども（80%）は、つい最近、最愛の祖父母を失ったばかりで、哀調の語りであることが多く、彼らの情動は、抗議—絶望—無関心へと動く典型的な“分離”を映し出していた。また、物理的に祖父母との接触を保っている場合でも情緒的な距離感があるという特徴をもっていた。彼らは、祖父母に親しいそぶりをするを、親のプレッシャーや祖父母の期待に応える義務と感じていた。この群の子どもたちは、彼ら自身が祖父母の年齢になったときにどのようになりたいかどんなふうにするかといった知識が少なく、高齢者一般を“おいぼれ”“さわるな”と馬鹿にした。これらより、日常的な両者の接触の重要性と、幼児期の孫への一貫した祖父母の愛情表出が、孫の人格形成や、情緒的発達に重要であることが見出されている。

筆者が行った青年期の回顧インタビューの結果からも、幼少期は、身体的ケアや、感覚的な遊びを通して祖父母との情緒的交流を図りながら、祖父母自身が率先して楽しむ遊び（童児性）を体験することで孫の情緒表現を豊かにし、性役割観を促していた（諏澤,2012b）。

このことから、祖父母の孫への情緒的巧妙さ加減は、特に孫が幼少時に発揮されることは普遍的に観察されたが、その関係性が剥奪された場合の影響については、今後の国内調査研究の課題である。

## Ⅱ期:学童期の孫と祖父母との関係性

この時期は、他のライフステージに比べて祖父母や相互の関係性の意味づけに関する研究は少ないが、教育資源としての祖父母機能に関する研究はいくつか散見される。Ferguson（2011）は、「社会的再生産」理論をもとにして、社会経済的地位が次世代へ引き継がれることを仮説とし、祖父母の教育歴を独立変数に、孫の認知発達との関連を大規模な横断研究により検証した（対象＝幼稚園1,000園×24人の子ども）。その結果、大卒の祖父母の孫は有意に早期に計算能力を獲得しており、他の社会人口学的要因（人種、性、家族構成、子どもの年齢、母親の初産年齢、都市化程度、幼稚園入園以前の養育）との共変関係を算定してもなお、大卒の祖父母をもつ子どもの算数スキルは高い結果であった。また、読みのスキルも同様に、大卒の祖父母をもつ孫は常に高く、社会人口学的要因を投入してもなお、結果に変化はなかった。これらから、社会経済的な強みは、複数の世代間へ影響することが証明された。

また、先のKornhaber & Woodward（1985）の調査では、対象年齢による統計的な有意差はなかったとし、それ以上のライフステージ別の比較はしていないが、取り上げられたエピソード的な事例からは、学童期特有の想起がみられる。すなわち、畑の耕し方の教示や、野球観戦、日曜大工の方法、料理、パーティーの準備、体を使った遊びなど、祖父母の興味や趣味が先行する活動に孫が付随するようなものが多い。

日本の調査では、学童期はケア、遊び、情緒サポート、知識伝達、躾や道徳観の形成など、最も多くの祖父母機能が語られ、幼児期に比べて、祖父母の積極的・意図的なかわりが多く、とりわけ、躾・道徳観形成のエピソードが最も頻出した（諏澤,2012b）。



一致した調査内容ではないため、日米の結果の完全な比較はできないが、両親が健在でその機能を果たしていても、日本では、祖父母の孫の生活への意図的な関与が多く、米国では、家族行事を媒介して、間接的に関与したり、祖父母の興味趣味の延長線上に孫との協働活動がみられた。Ferguson (2011) の教育的アウトカムと祖父母の関わりとの関連は、後に述べるElder Jr & Conger (2000) の青年期の孫を対象にした調査結果においても、祖父母との近接性が高いほど孫の成績の落ち込みを防いでいたことより、学童期に限定せず、何かの契機をもって祖父母の教育mentor機能が発揮されるシステムの存在も考えられる。いずれにしても、日本では、祖父母は、直接的な学習支援などの教育的なかかわりよりも、学齢期では社会的な教育機能が前面に表出されていることが予想された。

### Ⅲ期：思春期の孫と祖父母の関係性

この時期を対象とする研究は、他の時期に比べて、孫がある程度自身や家族のおかれた状況を言語化することが可能であったり、思春期にさしかかり親子間葛藤を生じることなどから、研究対象は多いが、縦断的調査による孫の発達の変化への影響を示唆するエビデンスは未だ少ない。Clingempeelら (1992) は、9-13歳の子どもをもつ202人の白人中流階級の家族とそれら家族(n=220)の母方祖父母を対象に、ベースライン～13か月～9か月後の全3時点において、祖父母と孫の関与度合い(交流頻度と情緒的近接性)、思春期の身体生理的变化、家族構造に関する縦断調査を実施し、①孫の思春期の発達と、②家族構造を独立変数として、祖父母とのかかわりの程度の関連性を検討した。その結果、②家族構造(ひとり親か両親家庭か再婚家庭か)に共通して、祖父-孫娘の関係において、思春期にさしかかると情緒的に距離を置き始める“情緒的距離仮説”が見出され、孫息子においては、祖父母がストレスの緩衝剂的役割に認知される“ストレス緩衝仮説”が支持された。この孫の性差については、親子関係でも、思春期になると男児は母親と距離をおくようになり(Anderson et al.,1989)、成熟した思春期の娘と父親の相互作用は減る(Steinberg,1987)ことが、祖父の場合においても適応された結果といえる。

またClingempeelらは、再婚家庭において、祖父-孫娘の接触が思春期を境に減少する結果について、母親が再婚という事象に注意が向くことで、孫娘に対するモニタリングが減り、それを祖父が埋め合わせようとする結果、より成熟の進んだ孫娘は、祖父の過度な介入を「出しゃばり」とみなし憤慨する傾向があるのではないかと結論づけた。しかし、孫息子と祖父母の関係性は情緒的にも物理的にも交流が維持されていた。Clingempeelらは、その理由に、男児の場合、思春期の身体的成長につれ両親と情緒的距離を置くようになる代償として、祖父母に情緒的サポートを求めることを挙げていた。

また、Hayslipら (2000) が行った、中学生～大学生までの181人を対象とした横断調査においては、男児の方が、家族の葛藤調整や重要事項の選択決定へ祖父母が関与すると回答した。Hayslipらは、この結果について、祖父母が養育を担う家庭の多くは、家族機能が崩壊していることに起因し、その結果、孫息子の場合は多様な問題行動を示す傾向にあることを挙げ、そのような孫息子自身の葛藤や問題解決方略としてのコミュニケーションに、祖父母が対人的資源として利用された結果だろうと推論している。

これらより、孫が思春期ごろの関係性は、両親同居の機能家族では、孫娘は思春期にさしかか

ると祖父と距離を置き始め、孫息子は祖父母を両親との葛藤の代償として情緒的サポートを求め、再婚家庭では、母方祖父が孫娘のモニタリングに親代行として介入しようとするが、孫娘はネガティブに見て回避する。そして、男児では、他の友人などの社会的サポートは活動の共有などのレベルにとどまり、身の上話などの深刻なテーマは祖父母を含む拡大家族に相談する傾向にあることが確認された。

さらに、1930年代から全米で増え続ける子どものうつ病に関する問題に端を発して、1989年から調査が開始された中西部の農村家族を対象とした長期縦断調査Iowa Youth and Families Projectからの示唆は大きい (Elder Jr & Conger, 2000)。その結果は、祖父母との近接性が近い孫ほど個人的社会的能力が良く、自信につながり、現時点で親密な祖父母がいる青年は学習到達度のVulnerability (脆弱性) を防御する影響を受け、祖父母の養育が青年の生活の一部になっているときには、彼らの脆弱性やリスクは顕著に減少していた。また、こうした祖父母の機能は、親が病気になるなど何かが起こったときにその穴を埋めるように、次々と変化する子どもをとりまく家族環境の安全装置であり、子どもの豊かな発達を保証する社会的余剰であると結論づけている。

日本の調査結果では、思春期は、情緒的サポート場面が突出して多く語られ、親子関係の葛藤を回避し、同時に社会的参照として祖父母の振る舞いを学んでいた (諏澤, 2012b)。またこうした傾向は、祖父母を対象とした面接調査でも見出され、思春期の家族間の軋轢や、友人関係や恋愛の悩みについて、親よりも祖父母を優先的に相談先としていた (諏澤, 2012a)。これらより、日本の場合は機能不全家庭に限らず、両親が健在な家族にあっても、思春期の親子関係や対人関係上の問題の避難先として、祖父母が安全装置になっていることが予測された。

#### Ⅳ期：青年期以降の孫と祖父母の関係性

成人として親元から経済的、精神的に独立した時期を対象とする研究は、孫が幼少時期よりもさらに少ない。Monserud (2008) は、18-23歳の孫を対象に、最大で4人／孫1人あたりの祖父母との親近感と、親子関係 (親子双方からの評価)、両親とそれぞれの祖父母との関係性についての聞き取り調査をもとに、両親の関係性が、祖父母―孫の関係を予測するか、孫の性による相違があるかを実証的に検討した。その結果、婚姻両親群では、父子関係が父方祖父母との親近感を予測し、母子家庭群では母子関係が母方祖父母との親近感を予測し、親子の絆と祖父母―孫の絆は血縁を介してつながるKinship理論 (Brown, 2003) を追認した。しかし、全体として、この調査はサンプルサイズが小さいことや、横断研究、回顧的データからの分析という限界がある。

そこで、家族関係のダイナミクスを詳細に捉えるには、質的研究結果が有用となる。

Taylor (1998) は、父親や祖父に宗教伝達の義務が課せられる家父長制文化圏のモルモン教一派The Church of Jesus of Latter-day Saints (LDS) に属する祖父と21-31歳の孫息子・孫娘8組へのインタビュー調査をもとに、成人した孫と祖父の関係性の意味づけを検討した。

その結果、祖父と孫は、情緒的近接性・関係性満足度・祖先を知ることの重要性・交流に伴う感情・祖父の意味づけについて、双方に類似していたが、祖父に期待する役割は、男女の孫と祖父自身において認知的なずれがあった (Table1)。

祖父自身が捉える祖父役割は、単に相続した、教会の任務、何も考えていないなど、個人によるばらつきがみられたが、孫が期待する祖父役割は、全体に共通して、”being there”そこに居る

こと”、“愛情を示してくれること”が抽出され、“世代間の結束力”に関連したものはなかった。反面、祖父の孫に対する期待には、LDSメンバーへの加入や、LDS教義に則った礼儀作法や正しい選択をすることなど宗教的価値観の世代間伝達に関する回答が目立った（Table1）。

また、実際のアクティビティーを通じた結びつきは、祖父—孫息子が孫娘よりも高く、祖母—孫娘の間柄の親密さ（Hagestad,1985）を追認する同性間の結びつきが証明された。

さらに孫娘は、魚釣りや狩りに同行せず、活動内容にも性差が認められた。また、祖父役割について、過去につなげる家族史家、役割モデル、遊び相手やヒーローのような”Selfexplanatory”役割（Kornhaber & Woodward,1985）も追認された。

祖父—孫関係を向上・修正するために必要な活動に関する双方の回答は、①養育やサポート②一緒に何かをする③模範を示す④そこに居ること⑤会話や訪問に分類され、祖父は、会話を重視し、孫は、実際のアクティビティを重視していた（Table2）。

日本においては、青年期（大学生）は、老いゆく祖父母の変化に孫自身がついてゆ

けない葛藤を抱えながらも、祖父母の死の迎え入れ方をそれまでの生き方に照らしながら、再評価することで、孫自身の価値観が再構築されており、父方、母方祖父母の別と、孫の性差による

Table2 祖父—孫関係の向上・修正に必要な活動  
（Taylor,1998の結果より筆者が表作成）

	回答者		
	祖父 (n=8)	孫息子 (n=8)	孫娘 (n=8)
養育・サポート	1	2	—
孫と一緒に何かをする	2	4	3
模範を示す	3	—	—
そこに居ること	4	1	1
会話・訪問	5	3	2

\*数字は回答順位

Table 1 祖父・孫の役割期待と実際のアクティビティー

（Taylor,1998の結果より筆者が表作成）

	回答者		
	祖父 (n=8)	孫息子 (n=8)	孫娘 (n=8)
役割期待(祖父に対して)			
何も考えていない	○		
単に相続したもの	○		
日誌をつけること	○		
教会の任務	○		
失望させないこと		◎	◎
そこにいること・一緒にいること		◎	◎
会話・訪問(会って愛情を示すこと)		◎	◎
役割期待(孫に対して)			
LDSメンバーになること	◎	○	○
宗教的責任		○	○
最善かつ正しい選択	○	<	○
祖父からの期待を感じない		○	○
実際のアクティビティ			
家族の集い(誕生日, 祝祭日)	19	9	13
祖父と孫が一緒に何かをする	15	13	9
訪問	9	10	
電話	7		
そこにいること	5	2	6
祖先の昔話	3		
旅行	7	3	1
教会の祭典や行事	7	7	
経済的贈与, 学費便宜	5	—	—
技術スキルの教育	3	—	—
手紙	4	—	—

セル内の○印は偏りのあった回答, ◎印は共通した回答, 数字は回答頻度

結果の偏りはみられなかった（諏澤,2012b）。しかし、生前、祖父母と実際のアクティビティを多く経験しているほど、祖父母の死は自身の価値観や生き方に大きく意味づけられており、大学入学後、祖父母宅が寄宿先となり接触が密になった事例では、祖父母の生き方や人格を再評価するきっかけにはなっていたが、自身の生き方のモデルにはなっていなかった（諏澤,2012b）。

### 3.まとめ

以上、本論では、祖父母—孫の関係性の変化について、孫—親—祖父母世代のライフステージを横断する関係発達ステージモデルとして概念化することを目的として先行研究レビューを行った。その結果、米国の調査結果からは、Ⅲ（思春）期の「親子の葛藤調整」、Ⅳ（青年）期の「価値規範教示」といった祖父母機能が男孫に頻出し、孫の性による関係性の相違がみられた。また、米国ではⅡ（学童）期～Ⅲ（思春期）期にかけて、知識伝達や教育投資など個人の学習に介入する祖父母機能が示唆されたが、日本では祖父母の道徳的教育や躾などの社会化教育が多く語られた。さらに米国では、Ⅳ（青年）期の孫は世代間結束よりも、個々の情緒的つながりを求める活動や時空間の共有を望んでいた。その一方で、日本の孫は大学生になると、祖父母の健康問題が顕在化し、老病死に対峙する祖父母の姿に、孫自身の生き方を照らしながら自己の価値観が再構築され、結果として世代間結束を促していた。この結果は、一般に親世代の初産年齢が米国の方が若いこと（US Bureau of Census,1996）を考えると、米国よりも日本の孫の方が祖父母の老病死により早く立ち会うことが予測され、その差によるものとも考えられる。他方、日本の孫の方が祖父母の老病死から自己の生き方の変換や価値観の再構成に意味づけ語っていたことは、Ⅱ（学童）期の祖父母の教育機能の違いとも関連するのではなかろうか。すなわち、日本では個人の学習能力よりも道徳や躾といった社会化を促す祖父母機能が発揮されるため、Ⅳ（青年）期になり孫の価値形成の一翼を担った祖父母の喪失が、孫の本来的な自律へと成長させるのではなかろうか。以上、祖父母—孫関係の変化は、孫の成長とともに変化することが示された。また、関係発達変化の移行時期（Ⅰ～Ⅳ期）については、本論の分析にあたり設定した時期の妥当性が示された（Figure2）。しかし、各期の関係性を促進・抑制する要因については日米の差が考えられ、今後さらに、検証を続ける必要がある。

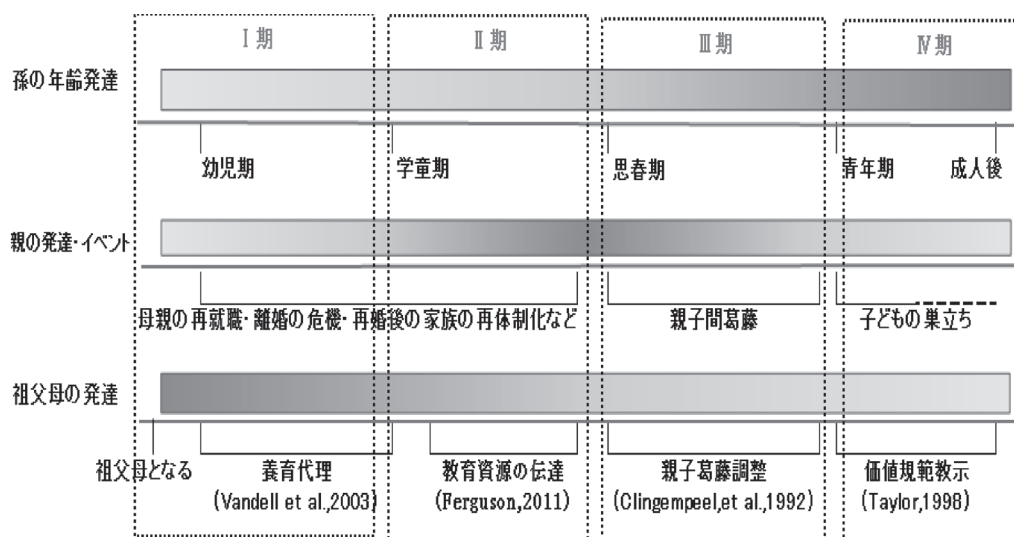


Figure2 祖父母—孫関係のライフステージモデル

\* 帯の濃淡は、対象とするライフステージの研究の多少を示す



## 文 献

- Anderson,E., Hetherington,E.M.,& Clingempeel,W.G.(1989). Transformations in family relations at puberty:Effects of family context. *Journal of Eearly Adolescent*, 9,310-334
- Baydar,N.,&Brooks-Gunn, J.(1998).Profiles of grandmothers who care for their grandchildren in the United States. *Family Relations*, 47,385-393.
- Barnett,M. A., Neppel,T.K.,Scaramella,L.V.,Ontai,L.L.,& Conger,R.D.(2010).Grandmother involvement as a protective factor for early childhood social adjustment. *Journal of Family Psychology*, 24 (5),635-645.
- Bronfenbrenner, U.(1979). *The ecology of human development: Experiments by nature and design*. Harvard University Press 磯貝芳郎,福富譲(訳). 人間発達の生態学—発達心理学への挑戦,川島書店.
- Brown,L.H.(2003).Intergenerational influences of perceptions of current relationships with grandparents. *Journal of Intergenerational Relationships*,1,95-112.
- Clingempeel,W.G.,Colyar,J.J.,Brand,E.,& Hetherington,E.M.(1992). Children's relationships with maternal grandparents :A longitudinal study of family structure and pubertal status effects. *Child Development*,63,1404-1422.
- Elder Jr,H.G.,Conger,R.D.,(2000). *Children of the land. Adversity and success in rural america*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Ferguson,J.L.(2011). Expanding notions of social reproduction :Grandparents' educational attainment and grandchildren's cognitive skills. *Early Childhood Research Quarterly*,26,216-226.
- Hagestad,G.O.(1981).Problem and promises in the social psychology of interactional relations.In R.W.Fogel,E,Hatfield,S,Kiesler.,&E,Shanas(Eds.), *Aging ,stability and change in the Family*. New York:Academic Press.
- Hagestad,G.O.(1985). Continuity and connectedness. In V.L.Bengtson&J.F.Robertson(Eds.), *Grandparenthood* (pp.31-48). Beverly Hills,CA:Sage.
- Hayslip Jr,B., Shore,R.J.,& Henderson,C. E.(2000).Perceptions of grandparents' influence in the lives of their grandchildren.In B,Hayslip Jr.,R, Goldberg-Glen(Eds.), *Grandparents raising grandchildren: Theoretical. Empirical, and Clinical Perspective*. New York:Springer
- Hayslip Jr. B,& Page K.S.(2012). Grandparenthood:In V,Ramachandran (Ed.), *Encyclopedia of human behavior*(pp.261-267). New York:Academic Press.
- Hetherington,E.,Cox,M.,&Cox,R.(1985). Long-term effects of divorce and remarriage on the adjustment of children. *Journal of the American Academy of Child Psychiatry*,24(5),518-530.
- Kornhaber,A.,&Woodward,K.L.(1985).Grandparents/Grandchildren.*Thevital connection*. New Jersey : Transaction Inc.
- Kornhaber,A.(2002) Mediation.In A.Kornhaber(Ed.),*The grandparent guide: The definitive guide to coping with the challenge of modern grandparenting* (pp.350-356). New York:McGraw-Hill Co.
- Monseroud,M.A.(2008).Intergenerational relationship and affectual solidarity between grandparents and young adults. *Journal of Marriage and the Family*,70,182-195.

- Robertson,J.F.(1975). Interaction in three generation families,parents as mediators:Toward a theoretical perspective. *International Journal of Aging and Human Development*,6,103-110.
- Silverstein,M,& Giarrusso,R.(2010).Aging and family life : A decade review. *Journal of Marriage and Family*,72,1039-1058.
- Steinberg,L.D.(1987).The impact of puberty on famuly relations:Effects of pubertal status and pibertal timing. *Developmental psychology*,3,451-460.
- Strom,R.D.(1997).Building a theory of grandparent development. *The International Journal of Aging and Development*,45(4),255-286.
- 諏澤宏恵(2012a).祖父母役割の取得過程—孫世代,親世代の相補的調整を通して.奈良女子大学人間文化研究科年報,27,115-124.
- 諏澤宏恵(2012b).祖父母はどのように孫の社会化エージェントとなるのか—青年期の孫の語りの分析から.家族心理学研究,26(2)
- Taylor,A.C.(1998). *Perceptions of intergenerational bonds: The comparison between grandfather and their adult grandchildren*. Dissertation submitted to the faculty of the Virginia Polytechnic Institute and State University in partial fulfillments of the requirements for the degree of DOCTOR OF PHILOSOPHY.
- Tomlin,A.M.(1998).Grandparents' influences on grandchildren.In ,M,Szinovacz(Ed.). *Handbook on grandparenthood*(pp.159-170). Westport CT:Greenwood Press.
- US Bureau of Census (1996). *Current population survey*.[www.census.gov/sipp/source.html](http://www.census.gov/sipp/source.html)
- US Bureau of Census (2001). *Co-resident grandparents and grandchildren*. [www.census.gov](http://www.census.gov).
- Vandell,D.L.,MaCartney,K.,Owen,M.T.,Booth,C.,&Clarke-Stewart,A.(2003). Variations in child care by grandparents during the first three years. *Journal of Marriage and Family*,65,375-381.
- Wallerstein,J.S.,Kelley,J.B.(1980). *Surviving the break-up: How children and parents cope with divorce*. New York:Basic Books.

# Developmental Transformation of Grandparents—Grandchildren Relationship between Japanese and American Empirical Studies: A Review Focusing on Life Stages of Grandparents, Parents, and Grandchildren

SUZAWA Hiroe

This study tests the applicability of a stage model of relationship development based on investigating characteristics and cultural differences in the transformation of the grandparent—grandchild relationship. This model assumes that the grandparent—grandchild relationship transforms along with the grandchildren’ s life stages: preschool age, school age, early adolescence, and adolescence.

The studies based on the U.S. data reveal that the relationship differs depending on the grandchildren’s gender: The “coping behavior with parents—grandchildren’s conflicts” in school-age children and the “mentoring role of value and norms” in adolescence are distinct for grandsons. American grandparents are directly involved in knowledge transmission to grandchildren, while Japanese grandparents emphasize education in morality and discipline. American adolescent grandchildren expect to share time and space with grandparents to enhance intergenerational emotional solidarity. In contrast, Japanese adolescent grandchildren strengthen intergenerational bonding when they face the aging, illness, and death of grandparents, and consequently restructure their values. These findings imply that the loss of grandparents advances the growth of grandchildren toward autonomy because Japanese grandparents assumed a role of value construction.

Although the grandparent—grandchild relationship transforms almost simultaneously in both Japan and the United States, the stage model has limitations in fully explaining the differences between nations and between the grandchildren’s gender.

Key-words: Grandparents, Grandchildren, Relationship Development, Stage Model,  
Intergenerational Bonding